1970 年代のポディル発掘とその成果

今 村 栄 一

The archaeology of Podil in the 1970s

Eiichi Imamura

は じ め に

われわれはキーフ（キエフ）[1] 滞在第 4 日目（2004 年 7 月 29 日）午後、ドニプロ（ドニエプル）川右岸沿いの低地地区ポディル（ポドル）を訪問した。この日の午前中、ウクライナ科学アカデミー考古学研究所、国立ウクライナ歴史博物館を訪ねたが、それらは古キエフの時代で言えば「ウラジーミルのまち」と呼ばれた地区にあり、地理的にはスタロキーフシカ（スタロキエフスカヤ）丘といってドニプロ川の水面からは 7、80 m ほど高い丘の上にある。その丘から、道端にみやげ物屋が並んでいることで有名なアンドリーフシカ（アンドレイ）坂の、割合急な勾配を下ってゆくと、そこがポディルである。われわれはまず、コントラクトヴァ広場（かつてポディルの中心であった市場（トルジシチェ）があった）に建つウスペンシカ（ウスペンスキー）教会（古キエフの時代にはピロゴシチャヤ教会と呼ばれた）を外から眺め、今シーズンの発掘現場のひとつを訪問したあと、考古学研究所付属ポディル考古学センターにて、ポディル発掘調査隊隊長ミハイロ・サハイダク博士からポディル考古学研究についての概要を聴いた。図や写真を交え、大変分かりやすい講義であった。

サハイダク博士のレクチャー、および帰国後入手したポディル考古学の概説書[2] の内容に沿って、特に 1970 年代以降本格的に実施されたポディルでの考古学発掘の成果を紹介することが本稿の目的である。また、東ヨーロッパ平原（ウクライナ、ヨーロッパ・ロシア、ベラルーシ地

---

[1] 本稿では、現在使用されている地名やウクライナ人の名前については、分かるかぎりでウクライナ語の発音に（たとえばキーフのように）合わせ、初出時にロシア語表記の発音も併記するという方針をとる。ただ、キエフ・ルーシ時代（9〜13 世紀）の人物・教会名などは、古ロシア語名をロシア語読みし、また、この時期のキーフのことは、古キエフと記す。ウクライナが独立した今日、キエフ・ルーシ研究において、固有名詞に関していつまでもロシア語表記のみを使い続けるというわけにはいかないと思われるので、本稿はそのテストケースとしたい。

[2] К・Н・グパロ『古キエフのポドル』(Гупало, 1982)。ロシア語で書かれている。ウクライナ語では、筆者名はК・М・フパロ。以下では後者を採用する。

域を包含する）における都市成立過程の研究に資するため、ポディルおよび古キエフ全体の成立についての議論にも触れる。後者に関しては、ポディル発掘の成果によってこれまでの通説が再検討を余儀なくされており、ポディル発掘の重要性がうかがわれる。

概説書の著者Ｋ・Ｍ・フパロは、1971 年に始められたウクライナ科学アカデミー考古学研究所による組織的なポディル発掘の多くを指導した考古学者で、Л・Ａ・プリャシコの序文によれば、この本はポディルを初めて歴史・考古学専門研究の対象としたものである。一般向けに書かれたものであるため注釈などはまったく付けられていないが、80 年代に書かれた古キエフに関する諸研究にも多く引用されており、70 年代のポディル発掘の成果を学問的水準を保ちながらコンパクトにまとめた著作であると言える[3]。

以下では、ポディル考古学の詳細に入る前に、古キエフの地誌、キーフ考古学の歴史、ポディル発掘の歴史を簡単にまとめておく[4]。

i) 古キエフの地誌

キーフはドニプロ川中流右岸のまちである。東ヨーロッパ平原の広い領域をその流域として持つドニプロ川は、古くから水上交通の大動脈であった。ドニプロ川は、その上流において西ドヴィナ川（ベラルーシを経て、リガに至る。ダウガヴァ川）と、支流のデスナ川を介してオカ川（ヴォルガ川と合流）、ドン川（アゾフ海へ注ぐ）両水系と、プリピャチ川を介して西ブグ川（ヴィスワ川と合流）、さらにドニステル（ドニエストル）川（黒海へ注ぐ）、ネマン川（ベラルーシ、リトアニアを貫流。ネムナス川）両水系と連絡しており、12 世紀初頭に書かれた年代記『過ぎし年月の物語』中では「ヴァリャーグ（ノルマン）からグレキ（ギリシャ）への道」と呼ばれている、バルト海と黒海を結ぶ水上交通の大幹線の一部を形作っていた。

キーフは、ドニプロ川の二大支流（デスナ川、プリピャチ川）とドニプロ川の合流点に位置している。デスナ川はドニプロ川とキーフ近傍で合流し、またその上流約 70 km の地点でプリピャチ川がドニプロ川に合流する。キーフは、いわば広大なドニプロ水系の、扇の要ともいえる地点に位置しているのである。それゆえここは遠距離交易路の交差点であった。またふたつの気候帯（森林帯と森林ステップ）の境界に位置して、北の狩猟採集世界と南の遊牧農耕世界の接点となっていた。

---

[3] 実は、われわれがこのたび講義を受けたサハイダク博士には『古キーフのポディル』（Сагайдак, М.А. Давнокиївський Поділ. Київ, 1991）という著作があり、最新の情報はそちらで読むことができるらしいのであるが、講義を受けた時点ではその存在を知らなかったため、キーフでその本を入手することはできなかった。日本に帰国後入手を試みたが、わが国では、キーフで出版されウクライナ語で書かれた考古学専門書は収集されていないようで、どうも日本にこの本はないことが分かった。

[4] 古キエフの地誌、キーフ考古学の歴史については、清水睦夫氏による紹介がすでに存在する（清水、

図 1　東ヨーロッパ平原の諸河川　Древняя Русь, С. 34–35 より作成。

キーフから遠く北へ（直線距離で）約 600 km 離れたヴァルダイ丘陵に源を発するドニプロ川は、キーフ地域に至るまで低地を貫いて流れているが、キーフの北約 15 km のドニプロ川右岸に位置するヴィシゴロドにおいて初めて、高地がドニプロ川の間近に迫る。キーフを挟む南北約 70 km の範囲で、高地がドニプロ川に接近する地点はたった 3 ヶ所（ヴィシゴロド、キーフ、トリピリャ）しかないが、その中でキーフは、特に恵まれた地理条件を持っていた。すなわち、デスナ川の合流点に位置し、また全方位から自然の境界線に囲まれていたのである。

キーフの自然の境界線となったのはドニプロ川、およびその支流で、キーフ付近では西に 3、4 km の距離でドニプロ川と並行して流れるリビジ川であった。ドニプロ川に面する東側からは、キーフの高台は容易に人を寄せ付けず、場所によっては河原から 7、80 m 以上の高さがあった。このキーフの高台はいくつもの丘に分かれていた。それは、ドニプロ川自身やドニプロ川、リビジ川の支流の浸食作用の結果であった。キーフには、ドニプロ川中流域のほかの場所ではどこにもみられないほど多数、天然の防備を備えた丘が形成された。

キーフのいくつもの丘の中にあって、スタロキーフシカ丘が、10 世紀以降の古キエフの発展

1983、第 2 章第 4 節「古代キエフの歴史地理」)。

図 2 古キエフの地理 Callmer, 1987, p. 355 より作成。

の中心となった。10 世紀に「ウラジーミルのまち」がスタロキーフシカ丘の北部分に出現した。このまちの名称は、10 世紀末～11 世紀初頭にかけてキエフ公であったウラジーミル（聖公。在位 980～1015 年）から、近代以降の古キエフ研究者が名付けたものである。まちは砦によって囲まれ、10 ha ほどの広さであった。このまちの中に古キエフにおける最初の石造教会であるデシャチンナヤ（十分の一税）教会が 10 世紀末に建設された。またこの教会の南西には石造りの公の邸（ドヴォル）があった。

「ウラジーミルのまち」の南側には、11 世紀に「ヤロスラフのまち」が建設された。3.5 km にもわたる砦に囲まれ、70 ha 以上の広さがあり、砦に作られた 3 つの門のうちひとつは有名な「黄金の門」であった。またヤロスラフ賢公（ウラジーミルの息子。在位 1019～1054 年）の治世で最重要の建造物であり、以後キエフ府主教の居所となったソフィア大聖堂は、当然ながら「ヤロスラフのまち」の中心に建設された。

11 世紀後半以降、スタロキーフシカ丘に隣接する丘へと、古キエフのまちは拡大していった。スタロキーフシカ丘の東にあるミハイリフシケ（ミハイロフスコエ）丘には、イジャスラフ（ヤロスラフの息子。在位 1054～68、69～73、77～78 年）と息子スヴャトポルク（在位 1093～1113 年）の時代にまちが建設された（それゆえ「イジャスラフ=スヴャトポルクのまち」と呼ばれる）。またスタロキーフシカ丘の西にあるザムコヴァ（ザムコヴァヤ）、デチンカ、シチェカヴィツァ（シチェコヴィツァ）の各丘、コピリフ・キネツィ（コプイリエフ・コネツ）には商工業地区（ポサド）が広がった。特にコピリフ・キネツィは広さ 40 ha で、丘の上にできたポサドの中で、もっとも規模が大きかった。

古キエフのまちはスタロキーフシカ丘周辺だけでなく、その南北にも広がっていた。まず北には、北から順にキリロフシケ（キリロフスコエ）高地、ドロゴジチ、ホレヴィツァがあり、特にキリロフシケ高地には、12 世紀前半に、そのころすでにチェルニゴフ（キーフの北、約 150 km にある、デスナ川に面するまち。現チェルニヒヴ）で独自の公家門を形成していたチェルニゴフ公によってキリロフスキー修道院が創設され、チェルニゴフ公の家族がしばしばここに埋葬された。南には、ペチェルシカ（ペチェルスカヤ）丘陵があり、11 世紀後半に、クロフスキー修道院とペチェルスキー修道院が、それぞれ丘陵の北と南に建設された。またそのあいだに、リューリク朝以前のキエフ公、アスコリドの墓があるとの伝承があるウホルシケ（ウゴリスコエ）や、ウラジーミル聖公の時代から公に属する村であったベレストヴェ（ベレストヴォ）が位置している。ペチェルスキー修道院からドニプロ川をさらに 3 km 南に下ったところに位置するヴィドゥビチには、11 世紀後半、ヴィドゥベツキー修道院が建設された。またフセヴォロド公（ヤロスラフの息子。在位 1076～77、78～93 年）の邸であった「赤邸」がここにあった。

ところで、キーフの地理的特徴としてドニプロ川右岸の高台であることをこれまで強調してきたが、古キエフのまちは丘の上だけを占めていたのではなかった。スタロキーフシカ丘の北

東、丘とポチャイナ川（ドニプロ川の支流。キーフ北東部に接し、港を設けるのに適していた）に挟まれたところには、低地地区が広がっていた。特にその南部は 10〜13 世紀古キエフの最大の商工業地区（ポサド）であり、最盛期にはその面積は 200 ha に及んだ。これが本稿において、われわれがその誕生・成長を概観するポディルである。（この節の記述には、История Киева, C. 19–22（И・И・アルテメンコ、Я・Е・ボロフスキー執筆）、C. 67–84（П・П・トロチコ執筆）を参照した）。

ii) キーフ考古学、ポディル考古学の歴史

キーフ考古学の歴史は 1820、30 年代に始まる。このときにはデシャチンナヤ教会およびソフィア大聖堂周辺の諸教会の土台、黄金の門跡などが発掘された。20 世紀初頭（1907〜08 年）には、Ｂ・Ｂ・フヴォイカが同じくスタロキーフシカ丘で、公の邸や手工業者の工房跡、多数の貴金属製品を発掘して研究者の注目を集めた。

第一次大戦と革命後の内戦による中断のあと、ソ連時代にもキーフの体系的な考古学研究は継続された。1936〜37 年、スタロキーフシカ丘でФ・Ｈ・モルチャノフスキーによる初期の砦跡の大規模な調査が行われ、1938〜40、1946〜52 年にはＭ・Ｋ・カルゲル指揮のソ連科学アカデミー物質文化史研究所（レニングラード）ならびに同考古学研究所（モスクワ）の調査隊がスタロキーフシカ丘やキーフの他の高台において広範囲に発掘調査を行い、その結果、それまでの古キエフに関する理解を補足し多くの点で改めさせる、多くの重要な資料が獲得された（それらはＭ・Ｋ・カルゲルの 2 巻にわたる著作で総括されている）。50 年代にはこのほか、Ｂ・Ａ・ボグセヴィチ、Ｂ・Ｋ・ゴンチャロフに指揮された発掘や考古学者たちによる市内の土木工事現場の観察も行われた。

短い中断のあと 1963 年に発掘は再開し、特に、ウクライナ科学アカデミー考古学研究所内に常設の発掘調査隊が設置された 1970 年代以降、キーフにおける考古学発掘の規模は拡大、実り多きものとなった。その際、これまでのようにまちの中心部だけで発掘が行われるのではなく、商工業地区（ポサド）や周辺部も発掘対象となった。こうして得られた新資料は、古キエフに関する知識を多くの点で根本的に書き改めることになった（Толочко, 1983, C. 6–8）。

一方、ポディルにおける本格的な考古学発掘は 1940 年代末から 50 年代初頭にかけて始まった。北ロシアのノヴゴロドなどで、腐食せず残された木造建築や木製品などが湿気の高い地層から発見されたのを受けて、ポディルでもそのような発見が期待されたからであった。その結果、1950 年にゲロイ・トリピリャ通りとヴォロシカ通りの交差点にあった学校の校庭から、製鉄跡が発見された。また、1969 年には、ヤロスラフシカ通り 41 番地で琥珀装飾品の工房が、またオボロンシカ通り 25 番地では造船所跡が見つかった。1971 年、П・П・トロチコが指揮するウクライナ科学アカデミー考古学研究所キーフ発掘調査隊ポディル調査団が、ポディルの

体系的な調査を始めた。70 年代のポディル発掘は、キーフの考古学研究において重要な一局面であった。フパロが『古キエフのポドル』を書いた時点（1982 年）までで 1 万 m^2 以上の土地が発掘された（しかし、これはポディル全体から見ればまだ 0.5 % ほどの面積にすぎないとのことである）（Гупало, 1982, C. 5–6）。

以下の、1〜4 章ではほぼ全面的にフパロの本に依拠して、70 年代のポディル考古学の成果を概観する。その内容の多くはわれわれが受けたサハイダク博士のレクチャーの内容とも重なっており、フパロがまとめたポディル発掘の概要は現在までも通用するものであると思われる。

１．ポディルにおける 1971〜72 年の発掘調査

まず最初に、ポディル考古学の特徴のひとつである、ポディルの文化層の特色ある性格を理解するため、1971〜72 年に行われた発掘調査の様子を簡単にまとめる。

1971 年、ポディル地区を通る地下鉄の工事に際し、地質調査のため、赤の広場（現コントラクトヴァ広場）において、深いピットが掘られた。実際土を掘り起こしたのは考古学者たちであったため、かれらは考古学的な見地からの調査をその場で行う機会を得た。

地表から深さ 2 m の地点まではほぼ黒色の土壌で、17〜20 世紀に形成された文化層であった。この文化層から砂層で隔てられた深さ 2.5 m の地点で 12〜13 世紀の文化層が記録され、その下にも砂層があった。このように文化層と砂層が交互に積み重なっていることがポディルの地層の特徴である（これについては後述）。この砂層の厚さは 3.5 m に及んだ。その下、地表から深さ 7.5 m のところで、湿り気があり、木片などが残存している 11 世紀の文化層が現れた。この下は砂層であったが、数センチ掘ったところで、5、6 才の女児の埋葬跡が発見された。骨はすっかり腐っていたが、棺の腐食跡と副葬品のビーズの首飾りが見つかった。上の文化層から掘り下げられたものであると考えられた。この砂層の下には再び文化層が存在したが、深さ 10.2 m まで掘ったところで地下水の流入のため発掘が中断された（この文化層からは土器のほか、木製の浮き、舟の櫂受けが見つかった）（Гупало, 1982, C. 17–18）。

このようにポディルではキエフ・ルーシ期の文化層が保存されていた。一方、スタロキーフシカ丘などのキーフの高台では、2、3 千年の長期にわたって形成された文化層が 2.5 m ほどの厚さしか持たず、しかも後世の建設活動によってキエフ・ルーシ期の文化層は破壊されており、考古学発掘にとって望ましい文化層の残存状況ではない。ポディルでも、12〜13 世紀までの文化層は 17 世紀以降の建築活動による破壊を受けているが、それより下にあるより古い文化層は破壊を免れた。ポディルの土壌の湿気の多さゆえ、後世の建築時に基礎がそれほど深く掘られなかったからである。このようなポディルの文化層の特徴はキーフ考古学にとって貴重なものとなった（Там же. C. 21）。

翌 1972 年の（当時の）赤の広場における発掘では、地下 12 m の地点に木造建築物の丸太造

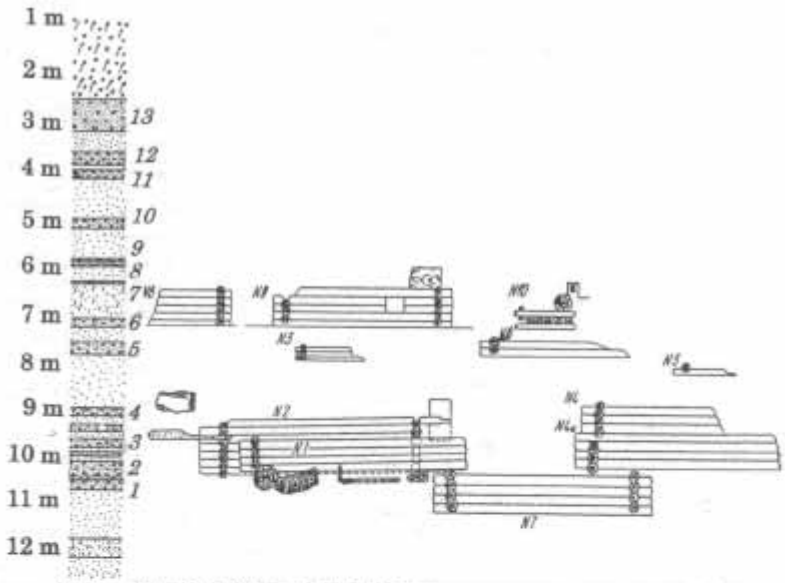

図 3　赤の広場発掘の文化層断面図　Гупало, 1982, C. 22 より作成。

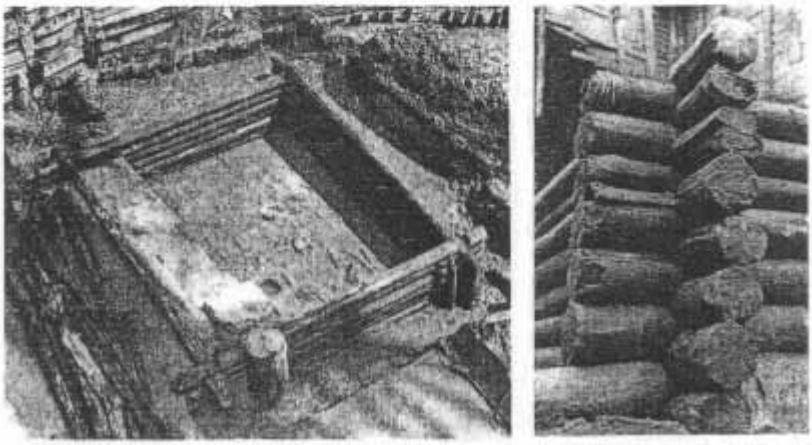

図 4　赤の広場発掘（1972 年）で見つかった 10 世紀の住居の骨組み
左写真：Толочко, 1983, C. 50；右写真：История Украйнской СССР Т. I. С. 317 より。

りの骨組みが下から 9 列目まで残っていることが分かった。屋敷（ウサージバ）は住居と作業小屋で構成され、高い塀で囲まれていた。また、建物の中には様々な日用品が残されており、コップやシャベルなどの木製品、骨製の櫛、青銅の縫い針、ガラス製のゲーム駒などが出土した。なぜこのような木造建築物や木製品などがポディルの土中で保存されていたかといえば、ドニプロ川の氾濫時に堆積した数メートルにも及ぶ砂が密閉された空間を生みだし、木を腐食させず保存したからであった（Там же. С. 15–16）。

ふたつの都市屋敷（発掘時、仮にА（アー）、Б（ベー）と記号で表された）がこのとき調査された。特に屋敷Бがポディルのこの区画における人々の居住の初期段階を明らかにし、屋敷Аの調査結果とも合わせて、この区画での建築活動の推移が再現された。ここには 7 層の建築水準面（ある限

定された時期のあいだに行われた建築活動の基準となった地表面）があった。それぞれの水準面は、残存していた木造建築の骨組みの位置によって示される。それぞれの建築水準面の間にはドニプロ川の働きにより沖積した砂層があった。もっとも下に位置しもっとも古い建築水準面を第 1 建築水準面として、第 7 建築水準面より上の文化層には木材の残存が含まれておらず、そのため建築水準面もここまでしか確認することができなかった。これより上の文化層に木材が残らなかったのは、それより下の文化層に比べて文化層中の水分含有度が少ないからであった。結局、赤の広場発掘では 13 層の文化層が確認された（Там же. С. 22–23）。

２．ポディル文化層の特色

ドニプロ川は 3 段階の河岸段丘（低いほうからポイマ、第 1 段丘、第 2 段丘）を形成しているが、ポディルの領域の大部分は第 1 段丘に位置している。この段丘は様々な時期にドニプロ川、その支流、キーフの丘からドニプロ川に流れ込む小川の浸食・沖積作用を受けた。人がポディルに居住し始めた時点での、ポディルの原景観がどのようなものであったかといえば、ドニプロ川の砂の沖積層がポディルの下層土[5] となり、地表面は比較的平坦であったが、赤の広場あたりがお椀状にまわりより低くなっていた。また、ポディルを貫いて、丘から発した小川がドニプロ川へ注ぎ込んでいた（Гупало, 1982, С. 18–20）。

このような下層土の上に堆積したポディル文化層の、層序・堆積学上の特徴は、文化層と砂層が交互に堆積していることであり、そのことはすでに 19 世紀の歴史家にも知られていた。1971 年には、上述の赤の広場での発掘以外にも数ヶ所でピットが掘られ、すべての箇所で文化層と砂層の交互の堆積が見られた。これはポディルの層序・堆積学的研究のほんの始まりにすぎず、上述の通り、引き続き赤の広場で行われた 1972 年の発掘において、ポディルの地層が、文化層と砂層が交互に積み重なり、パイのような地層を形成していることがはっきり意識され、ポディルにおける層序・堆積学的研究が本格的に開始されたのであった。このような、ポディルの地層の特徴である、文化層と文化層を隔てる考古学遺物を含まない砂層は、各文化層に含まれる、閉鎖的な、遺物の集合全体を分離することを可能にする。この集合の中で、同時期に文化層に落ちた遺物の総体が、他のそれと区別される形で明らかとなる。これらの遺物集合の年代的下限はそのときの地表面、上限はその集合体を含む文化層を上から覆った砂層であることになる（フパロの指摘は大変興味深いが、このようなポディルの文化層の特徴を用いた考古学遺物の編年などの研究成果については、残念ながらこの著作の中には挙げられていない）（Там же. С. 17–23）。

[5] 文化層の下にある、自然的要因によって堆積した自然層のこと。

３．ポディルはいつから居住されたか

1970 年代にポディルでの発掘調査が始まるまで、ポディルにいつから人々が居住し始めたのかという問題は、文献史料および少数の考古学資料の情報に基づき議論されていた。文献史料の中でポディルについて言及されるもっとも早い例は『過ぎし年月の物語』945 年の記事である[6]。この記事の内容から、10 世紀半ばまでポディルには人が居住していなかったという考えが主張されていた。しかしながら、この引用部の直後、年代記作者が、彼の執筆した時代（1070 年代）にスタロキーフシカ丘に有力者が居を構えていたことを、オリガの復讐譚の話の流れとは無関係に挿入した部分があることから[7]、実際にこの記事を書いた年代記作者は、10 世紀半ばの古キエフの地誌を 11 世紀後半の状況と対照させて理解していたことが見て取れる。このため、11 世紀後半に生きた年代記作者が書いた年代記のこの部分だけを抜き出して、10 世紀半ばのポディルに人々が居住していたか否か論ずるのはかなり困難なことであり、それゆえこの問題の解決には考古学研究が必要不可欠であった（Гупало, 1982, C. 7–15）。

ただし、いつからポディルが居住され始めたかという問題に関して、土器やその他の出土品からは大まかな時間枠でしか知ることができない。赤の広場発掘での下から 5 層分の建築水準面（上述）の年代は、フパロによれば、出土品からだけでは 10 世紀後半〜11 世紀前半という広い範囲しか決定できない。また、赤の広場発掘で見つかった住居跡内で、ビザンツ皇帝ロマヌス 1 世のフォリス銅貨（920〜944 年鋳造）、コンスタンティノス 7 世のフォリス銅貨（945 年 1 月 27 日〜4 月 6 日鋳造）が発見されている。ただしフパロはこれらを文化層の年代の上限としか捉えることができないと考えており、もしそうならば文化層の年代を出土貨幣から決定することはできない（Там же. C. 23–25。ただ、ノヴゴロド考古学では貨幣は比較的短時間で輸入されかつ埋蔵されると考えており、もしそうならば、2 枚のビザンツ貨幣は、発掘された屋敷に 940 年代後半、人が居住していたことを示すであろう。参照：Носов, 1990, C. 147–148）。

ところが、ポディルへの居住開始時期を知るために重要な、赤の広場発掘で見つかった下層の建築水準面の年代をめぐる問題が、年輪年代法により解決された（年輪年代法は、絶対年代

---

[6] ドレヴリャネ族（キエフの西方、プリピャチ川流域に居住）に殺されたキエフ公イゴリの復讐をその妻オリガが果たすという復讐譚の中で、ドレヴリャネの者たちが自分たちの公マルのために、オリガとその息子スヴャトスラフを捕らえようと、キエフにやって来る場面である。

「……ドレヴリャネはその数 20 人の身分の高い家臣を船でオリガのもとへ送り、ボリチェフ（の坂）の下に船をとめた。当時水がキエフの山のそばを流れていて人々はポドリエ［＝ポディル——筆者注］に住んでおらず、山の上に（いた）からである。その町がキエフであった」（『ロシア原初年代記』、61 頁）。

[7] 「……そこにはいまゴルヂャタとニキフォルの邸がある。一方公の邸は町の中にあり、［いまそこにはヴォロチスラフとチュヂンの邸がある。また鳥網場は町の外にあり、町の外には他の邸もある。——もとのテクストにはないが、邦訳者が、他の写本により補い訳出した部分］そこにはデメスチクの邸があって、塔邸が山の上の聖母教会のうしろにある」（同上、61 頁）。

決定法のひとつで、樹木の年輪が原則として 1 年に 1 層形成され、その幅や構造は形成年のおもに気象条件によって変動することを利用して、試料の絶対年代を分析する方法)。われわれが今回話を伺ったまさに本人であるミハイロ・サハイダク博士が、この発掘で得た木材試料によって 1970 年代後半に、ポディルの木造建築物の建材を対象とする年輪年代の絶対目盛（780～1123 年）を作成した。

ただし、この時点ではポディルの試料から絶対的な基準となる年が得られなかったため、北ロシアのノヴゴロドやポーランドのオポレにおいて作成された年輪年代の絶対目盛との比較によってしか、ポディルの年輪年代の絶対目盛は作成できなかった（ちなみに、今回のサハイダク博士の話によれば、年代記に建造年代が記されている石造建築の土台の発見や年代記中の洪水の記録などから、年代目盛はその後裏付けが取られたようである)。

こうして作成されたポディルの年輪年代の絶対目盛を利用して、第 1 建築水準面に建てられた建物の骨組みに使用された建材の伐採年は 913 年であると決定された。同様に第 2 建築水準面――972、975 年、第 3 建築水準面――983 年、第 4 建築水準面――1002 年、第 6 建築水準面――1045、1047 年、第 7 建築水準面――1058 年であった（第 5 建築水準面からは年輪年代測定が可能な試料が得られていない）(Гупало, 1982, C. 25–26)。

すなわち、第 1 と第 2、第 4 と第 6 各建築水準面のあいだをのぞき、赤の広場発掘の区画では、同じ敷地内の建物の改築が十数年のうちに行われたのであった。これらの改築が、ドニプロ川の氾濫と関係していたことが、ドニプロ川の水位についての研究から推測できる。Г・И・シヴェツィは、紀元前 2148 年～紀元後 1817 年までのドニプロ川の水量について研究した(Швец, 1972、Швец, 1978)。それによれば、紀元後 742 年以降はドニプロ川の増水期に当たるが、この増水期の中にも水量の増減のサイクルがある。たとえば、第 2 建築水準面の建材が伐採されたのは、962～969 年、979～980 年のドニプロ川の増水期のあいだ（972、975 年）であり、次の第 3 建築水準面の建材も増水期の終わった 983 年に伐採され建築に用いられたものである。このように年輪年代法により決定される各建築水準面の建材の伐採年は、ちょうどドニプロ川の増水期が終わり、減水期が始まるときに一致している。赤の広場の発掘結果より得られたポディルにおける建設活動のサイクルと、シヴェツィの研究に基づくドニプロ川の水位の増減との関連をめぐるこのような図式はまだ仮説的であるが、ジトニ市場における発掘（後述）においても同様の図式を当てはめることができ、古キエフのポディルにおける建設活動は、ドニプロ川の水位の上昇がもたらす氾濫にもっとも条件付けられていたと考えてよさそうである。しかしながら、このようなドニプロ川の絶えず繰り返される氾濫による一時的な中断がありながらも、10～12 世紀の間には、人々がここに事実上間断なく居住したのであった（Гупало, 1982, C. 26–29)。

フパロによれば、9 世紀以降にポディルが、ひとつの中心から居住され始めたのか、それとも

同時に複数の中心から居住され始めたのかは、まだはっきり分からない。ただ、ポディルの西側、スタロキーフシカ丘の麓の、第 2 段丘上にある、残りの地域より 7、8m 高い地区が、ポディルの中でもっとも早く居住され始めたようである。この地区にあるジトニ市場での発掘（1973～74 年）で見つかった木造建築の建材の伐採年は、年輪年代法によって、887 年だと算出された（Там же. С. 28–29）。ポディルのほかの地区では10世紀初頭（900、901、913 年）の木造建築が最古のものであることをふまえ、ポディルの居住は丘の麓のこの地区から始まり、10 世紀初頭になってポディル中央部へ広がったと確言する研究者もいる（Mezentsev, 1986, p. 60）。

フパロは、1970 年代のポディル発掘以前から考えられてきたような、8 世紀以前にポディルに人が居住した可能性について否定的である。ポディルに紀元後すぐに人が居住したと考える研究者は、ポディルでローマ貨幣が発見されることをその証拠として挙げてきたが、フパロは、それは水の流れによって丘側の地区から流されて来たりなど、何らかの理由でポディルの外部から後世にポディルに運ばれて来たものだとし、紀元千年紀前半からポディルが居住された証拠にはならないと考えている。また 6～8 世紀の遺物はポディルではほとんど発見されておらず、さらにこれまでの発掘でポディルにおけるこの時期の文化層の欠如が明らかにされている（Гупало, 1982, С. 29–33）（この問題は第 5 章でも再び取り上げる）。

４．ポディルの住居、住民

1971、72 年の赤の広場発掘では、ふたつの都市屋敷が調査されたが、これ以後、ポディル各所で丸太小屋や屋敷全体が発掘され、フパロによれば、60 棟以上の丸太小屋がこれまで見つかっている。70 年代のポディルでの発掘により、ノヴゴロドをはじめとする北ロシアの都市住民と同じく、ポディルの住民は平地式の丸太小屋に住んでいたことが証明された（Гупало, 1982, С. 36–37）。

ポディルで発見される建物の大部分は、丸太造り構造を持っているが、それらは大きく住居と作業小屋に分類することができる。ある建物が住居であったかどうかは第一に暖炉のあるなしで分かる。もし建物の骨組み内に暖炉が見つからないならば、それは作業小屋であった。作業小屋は住居より規模が小さく、壁が薄く、床が張られることは稀である。建築に使用された丸太（ほとんどがマツ）も住居のほうが太かった（直径 18～30 cm）。また住居の大部分は基礎の上に建てられたが、作業小屋は基礎を持たなかった。

一方、住居にはふたつのタイプがあり、1 部屋の建物（20～30 m^2）と 2 部屋（5 つ壁）の建物（25～38 m^2）があった。暖炉は、前者では入り口近くの隅に、後者では大部屋の入って右手の隅に置かれた。住居の玄関は地面より高い位置にあり、玄関ポーチまでは階段が備えられた。そのため一般的なポディルの住居は、平屋であったにも関わらず、比較的背が高いものであった（Там же. С. 38–44）。

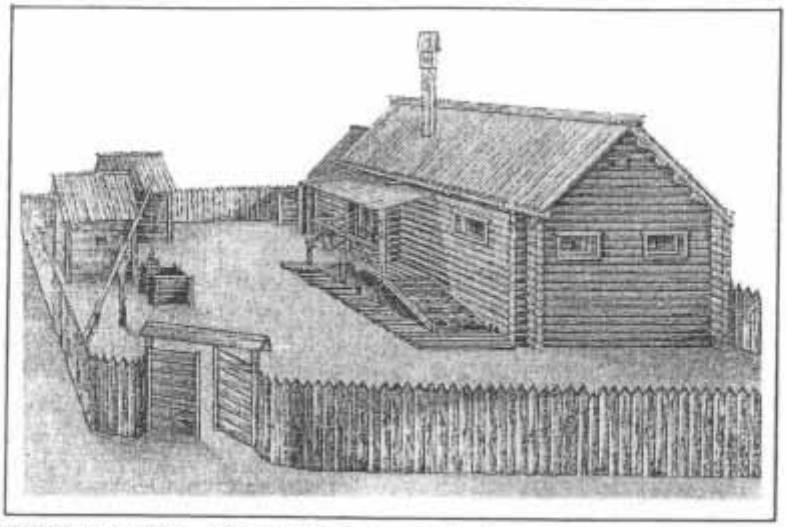

図 5　ポドルの屋敷（11 世紀）の復元図（Л・И・アンドリエフスキー、В・А・ブイノフスキーによる）Толочко, 1983, С. 123 より。

住居といくつかの作業小屋をその敷地内に含む屋敷（ウサージバ）が、ポディルでの街区の主要構成単位であった。フパロによれば、個々の屋敷の規模は、これまで屋敷全体が発掘された例がないため不明であるが、たとえば赤の広場での発掘において 10～11 世紀の屋敷の敷地は調査されただけで 1,000 m^2 に及んでいる（他の発掘では敷地面積 500 m^2 以上、約 300 m^2 という例がある）。一般的に屋敷内には、中庭を囲むように住居と作業小屋が建てられた。洪水などにより建物が建て直された際、住居と作業小屋の位置が交替することがあったが、中庭には常に何も建てられなかった。屋敷はおもに板塀で囲まれ、通りや隣の屋敷から隔てられていた。塀で区切られた互いの屋敷の境界は、最初に人々が居住したときに定まったものが数世紀にわたって変化しないままであった（Там же. С. 44–49）。フパロはこの理由を居住に適した領域が限られていたためであると説明しているが、北ロシアのノヴゴロドでも同様のことが報告され、ノヴゴロドにおける有力者家系が、同じ敷地内およびその周辺において代々居住し続けた証拠とされているだけに（Колчин & Янин, 1982, С. 112）興味深いところである。

ポディルにおいてはノヴゴロドで発見されるような木製の街路舗装は見つかっておらず、屋敷内で住居へ導く木製舗装が見られるが、これも広く普及していたわけではなかった（Гупало, 1982, С. 48）。

70 年代のポディル発掘以前は、キエフ・ルーシ期のポディルの都市計画を知る手だてとしては、17～19 世紀に作成された地図などが利用されてきたが、考古学発掘はこの問題に新たな資料を与え、ポディルにおける街区形成が、歴史的に形成された地形や一定の自然境界線の上に生じたことを解き明かした。すなわち、ポディルの領域が全体として現在のポシトヴァ広場を頂点とし、ドニプロ川の流れとキーフの丘を2 辺とする三角形を形作っていたこと、キーフの丘

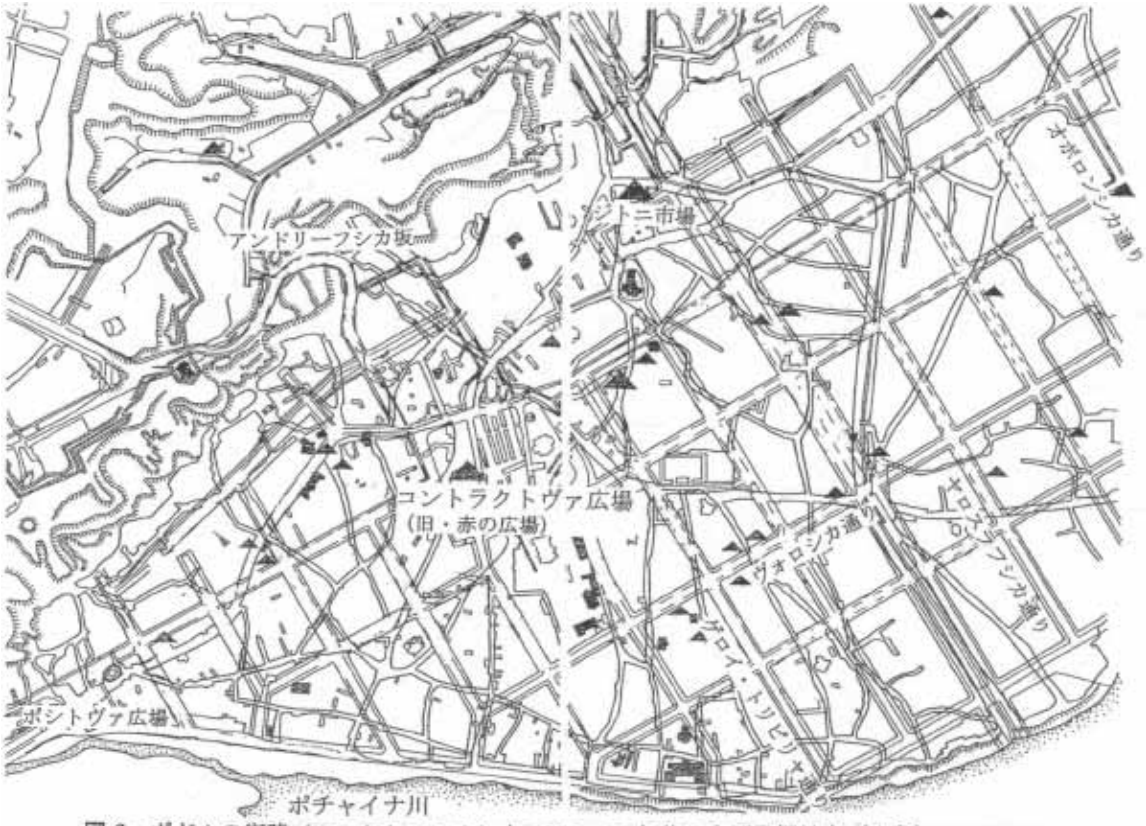

図 6 ポドルの街路（1803 年と 1974 年）と 1950～80 年代の主要発掘地点（▲印）
格子状の通りが 1974 年、それより細い通りが 1803 年のもの。Гупало, 1982, C. 12–13 より作成。

からドニプロ川へ、ポディルを横切って 3 つの小川の流れていたことが、ポディルの街路形成の性格に影響を及ぼしたのである。また、発掘時に発見された道路跡から、ポディルの目抜き通りがドニプロ川の流れと平行に走り、いくつもの狭い通りがそれに直交していたことが分かる。前者の通りの幅は約 6 m、後者は 3 m 以下であった。以上の各屋敷と街路についての研究から、フパロは、ポディルが 10 世紀後半以降すでに、十分発達した、屋敷を単位とした居住体系および街路を基礎とする都市計画を持っていたと考えている（Там же. C. 49–51）。

一方、公共施設（まず第一に教会）、市場、港などは、占有面積では前述の屋敷や通りに劣るが、ポディルの空間構成にとっては支配的な要素であった。これらの存在については年代記史料の記述から分かるが、考古学研究はまだ十分ではない。ポディルにあった教会で年代記に名が挙がるのは 4 つにすぎないが、実際はもっと多くの教会があったと考えられ（サハイダク博士によれば、2003 年の発掘で 11 世紀半ばの木造教会が発見されたそうである）、また市場（トルジシチェ）についても場所はおよそ分かっているが、どれくらいの広さであったかはまだ分かっていない（Там же. C. 51–53）。特に、古キエフの民会がしばしばポディルの市場（トルジシチェ）で開かれたことが年代記にはっきり書かれていることから、ポディルの社会的空間構成

を明らかにすることは、古キエフ社会全体の組織を復元することにもつながると思われる。

ポディルの人口を、ポディル全領域の面積、そのうち屋敷地の占める割合、平均的な屋敷地の広さ、および一世帯あたりの人数を勘案して、最大で 24,000 人だとフパロは考古学的立場から算出した。古キエフ全体の人口が 5 万人という試算があり、これらに基づけばポディルは古キエフの人口のうち約半分を占めていたことになる（Там же. С. 107–108）。

その民族構成はかなり雑多なものであり、文献史料からは東方、西方出自の住民が多数居住したことがうかがえる。異国人の多くは商人であったが、戦士のベルトを装飾する留め金などの鋳造に使用された、ポディルで出土した 10 世紀の鋳型に「ヤジド」という東方出自だと思われる職人の名が刻まれていた例もある（Там же. С. 109）。

かねてよりポディルは古キエフの手工業中心であると考えられてきたが、考古学上の証拠は少なかった。ポディルで考古学研究が進展するにつれ、最近になってこの地域の手工業的な性格が明確になってきている。特に重要な意味を持つのは、手工業者の作業場の発見である。1950 年、Ｂ・Ａ・ボグセヴィチが、ゲロイ・トリピリャ通りとヴォロシカ通りの交差点にあった学校の校庭から、鉄精錬炉跡と鍛冶場跡を発見した。前者が出土したのは 10 世紀の文化層であった。製鉄はのちに古キエフ郊外で行われるようになることが知られているが、10 世紀にはポディルにおいて行われていたのであった。また 10 世紀ポディルで貴金属細工職人が働いていたことも、1975 年の発掘で鋳型が発見され（うちひとつが「ヤジド」の名が刻まれたもの）、分かっている。

図 7 「ヤジド」の鋳型
鋳型の側面に文字が刻まれている。Археологія Києва, С. 48–49 より。

しかしながら、明確に 10 世紀のものだということのできる手工業跡の発見は以上の 2 件にすぎない。木工品・骨角器・土器はポディルから大量に発見されるのであるが、骨角器職人の倉庫らしきものの発見がポディルでの生産の傍証となるくらいで、作業場自体の跡はまだ発見されていない。また、ブレスレットがその代表であるガラス加工、琥珀加工、キエフ・ルーシ全域に特徴的な出土品であるスレート製のはずみ車の錘の生産については 11 世紀以降の作業場跡

しか発見されていない。また、貴金属加工についても上記の鋳型の発見は例外的に早い時代のもので、キーフで発見される多くの鋳型は 12〜13 世紀のものである。これまでの考古学発掘の結果から 10 世紀のポディルの手工業について論ずるには、まだ資料が不十分である（Там же. С. 53–89）。

古キエフはキエフ・ルーシ最大の商業中心であったことから当然ポディルでも商業活動が盛んに行われたはずであるが、ポディルにおける商人の活動に関する考古学上の証拠は手工業の場合ほど多くない。フパロが一例として挙げているのは古キエフに居住したノヴゴロド商人についてである。かれらの居住区がヴォロシカ通りの発掘（1950、1955、1974〜75 年）で見つかっている。ノヴゴロドの人々が信仰した聖ミハイル教会らしき建物の基礎がここに残され、またこの地区の屋敷からムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ公（1076 年生まれ。1136 年没）の印章が発見された。この公が、11 世紀末から 12 世紀初頭にかけての 20 年以上のあいだノヴゴロド公の地位にあり、1125〜32 年にはキエフ公であった人物であることから、この印章の発見がここにノヴゴロド商館があった証拠になるとフパロは考えている。発掘された住居の大きさ、炉の配置などは他のポディルの住居と変わりなく、そのことからはここに商館があったように思えないが、ここでは貨幣、ブレスレット、アンフォル（ふたつの把手を持つ壺）、胡桃の実などビザンツ由来の遺物が多く出土し、これらはポディルの一般的な屋敷では見つからないものであり、ここにかなり富裕な人物が住んでいたことが分かる。ヴォロシカ通りは、古キエフの水の玄関である港があったポチャイナ川から近く、他都市の商人の商館があったと考えても不自然ではない（Там же. С. 90–101）。

また、ポディルにおいては、遺失されるか、意図的に埋蔵されるかして土中に埋もれたビザンツ貨幣が他にも見つかっている。古キエフにはコンスタンティノープルに自分の商館を持つ「グレチニク」と呼ばれた商人がいたらしく（どの史料から知ることができるのか不明である——筆者）、そのような商人がビザンツからもたらした貨幣であるかもしれない（Там же. С. 105）。

ポディル住民の主要な部分はこれまで見たような商工業者であると思われるが、かれらがポディル住民の唯一のカテゴリーではなかった。フパロは、公・貴族・千人長・従士団など古キエフ社会の上層の人々がポディルに居住していたことを示す文献史料やブイリーナ（英雄叙事詩）をいくつか引用している（Там же. С. 105–107。このことを示す考古学的証拠は、残念ながらフパロは挙げていない）。

５．ポディルの成立時期

第 4 章まででは、フパロの記述に従って 1970 年代にポディルで行われた考古学研究の成果をまとめた。それをふまえ本章では、ポディルの集落の形成時期に関する議論、および古キエフという都市の形成においてポディルがどのような役割を果たしたと考えられているかを、ウク

ライナ人研究者および西欧の研究者が書いたいくつかの論考を用い、まとめてみたい。

ここで参照する諸論考はどれも 1980 年代に書かれたもので、より新しい論考は参照できなかった。ただし、80 年代には古キエフの誕生に関する論考が他の時期より多く書かれたようである。それには理由がある。それは、第 1 に、これまで紹介してきたポディル発掘のような、70 年代に広範に実施された考古学調査によって古キエフの誕生に関する多くの新資料が得られ、それをもとにして古キエフの初期の歴史を考え直そうとする研究が現れたこと、第 2 に 1982 年にキーフ（キエフ）建都 1500 年が公式行事として祝われた結果、キーフの初期の歴史に関する研究が多く出現し、またそれらに対するリアクションとしてキーフの起源をそれほど古い時期に求めることに対する批判も現れ、活発な議論が生じたことである。

1982 年、キーフでは建都 1500 周年が公式に祝われた。『キエフ史』（1982 年。ロシア語で書かれた）の刊行、これにちなんだ全ソ連邦考古学会議（1984 年）などもこの一例である。この年に建都 1500 周年が祝われることになった経緯についてはよく調べることができなかったが、482 年にキーフが誕生した、というのが少なくとも当時の公式見解であったわけである。5 世紀末にキーフが誕生したというこの定説は、ソヴィエトにおけるキエフ・ルーシ史研究の大御所であったБ・А・ルィバコフが唱えた説を基礎にしていた（たとえば Рыбаков, 1982, C. 90–107）。

ウクライナ考古学の第一人者で、ウクライナ科学アカデミー考古学研究所の所長であるП・П・トロチコもこの説に賛同していた。1982 年、雑誌『ソ連史』にかれが発表した「キエフの誕生と初期の発展（建都 1500 年によせて）」をもとにその考えを以下に要約する。

トロチコによれば、東スラヴ人社会の歴史的発展の中で、6〜7 世紀、8〜9 世紀のふたつの時期が古キエフの成立に大きく関連する。まず 6〜7 世紀には、東スラヴ人のあいだで政治的・文化的統合がはじまり、いくつかの種族がまとまって種族同盟が形成された。その行政・政治的、信仰上の中心のひとつが古キエフであった。古キエフの継続的な発展はスタロキーフシカ丘とザムコヴァ丘において 5 世紀末から 6 世紀初頭にかけて開始された。スタロキーフシカ丘で発掘されるこの時期の異教の神殿跡、砦跡は、古キエフが行政・政治的、信仰上の中心であった証拠である。ただし、この時期の都市は「都市の萌芽」であり、経済的中心という要素は少ない。古キエフがドニプロ水系の収束点に位置し、自然の防御を伴う高台をいくつも持ち、いくつもの種族の境界に位置していたことが、ここに種族同盟の中心が形成された原因である（Толочко, 1982, C. 43–46）。

続く 8〜9 世紀は、東スラヴ人社会の歴史的発展の第 2 段階であり、多くの種族中心が真の初期封建都市へと変化した。古キエフもそのような都市のひとつであった。このときドニプロ川中流域に形成された国家「ルースカヤ・ゼムリャー」とその首都である古キエフは、相互に影響を与えながら発展していった。国際商業関係を示す様々な出土品と商工業地域（ポサド）であるポディルの形成が、この時期の古キエフの経済的発展を示す証拠である。すでに 6〜7 世紀

から部分的に居住されていたポディルは、8〜10 世紀のあいだ急速に成長し、10 世紀前半には、封建都市の商工業地区を構成する、成熟したポサドとなった（Там же. С. 46–48）。

トロチコの考えは未だウクライナ、ロシアにおいて定説であろうと思われるが、かれに対する批判が、特に欧米で見られる。かれが批判される点は、ポディルの発生時期を早く考えすぎていること、10 世紀前半にはすでに古キエフが完成した封建都市であるとみなす点である。

まずポディルの発生時期についてであるが、第 3 章で見たように、フパロは、1970 年代のポディル発掘の結果から、ポディルの発生時期を 9 世紀末〜10 世紀初頭だと考え、紀元千年紀前半や 6〜8 世紀からポディルが居住されていたという考えを批判している。

ヴォロジミル・メゼンツェフ（現トロント大学）もトロチコがポディルの居住開始時期を早くは 6〜7 世紀と考えていることを批判する。メゼンツェフによれば、先に引用した論考「キエフの誕生と初期の発展」の翌年に発表された諸論考中でトロチコは、ポディルで発見される、ろくろを使わず製作された土器を 7〜8 世紀あるいは 8〜9 世紀のものと考え、都市のポサドとしてのポディルが成立したのは 7〜8 世紀だと書いている[8]。なぜならトロチコはこれらの土器をロムヌイ文化あるいはヴォルインチェヴォ文化に属していると考え、それぞれの文化を 8〜10 世紀、7〜8 世紀の時期に相当すると考えていたからある。これに対しメゼンツェフは、ロムヌイ・ヴォルインチェヴォ（ロメンスコ・ボルシェフスカヤ）文化はトロチコの想定より遅い時代のものだと考える。ロムヌイ文化型の土器は古キエフに隣接するドニプロ川左岸地域西部では 10 世紀にも使用されており、ヴォルインチェヴォ文化の時期についても 8〜9 世紀のものだと考える研究者もいるからであった。またろくろを使わず製作された土器は、ポディル内でも早くから居住されたと考えられる西側の丘の麓だけでなく、それより遅く（10 世紀初頭以降）居住されたと考えられるポディル中央部でも出土しており、中央部から出土のこのような土器はトロチコの考えるような早い時期のものではないと考えられる。また丘の麓でも中央部においても、ろくろを使わず製作された土器が見つかった地層からは、ろくろを使って作られた 9〜10 世紀の古ルーシ型土器も出土している。以上のことからメゼンツェフは、ポディルで見つかったろくろを使わず製作された土器は 9〜10 世紀のもので、トロチコの言うような 7〜8 世紀のものではなく、それゆえトロチコが考えるほど早い時期にポディルが成立したのではないと主張している（Mezentsev, 1986, pp. 55–59）。

またメゼンツェフは、9〜13 世紀のポディルに特徴的な平地式の丸太造りの住居に注目し、ポディルが 9 世紀以前には居住され得なかったことを主張している。9〜10 世紀以前のドニプロ川中流域で見られる初期スラヴ考古学文化に属する住居は竪穴式であるが、ポディルでは土壌の湿気の多さと地下水面の高さゆえに、そのような竪穴式の住居を建てて居住することは不可能

[8] つまり、このときトロチコは、以前の考えよりポディルの成立時期を 1 世紀遅らせた。

であった。平地式の丸太造り建築の登場によって初めて、ポディルに居住することが可能になったのであり、実際、これまで発掘された約 60 棟の 9〜13 世紀のポディルの住居は例外なくこのような構造を持っている。そして、このような平地式の丸太造りの住居は 9〜13 世紀の古ルーシ文化の特徴であった。このようなタイプの住居は北ロシア（ノヴゴロド、スターラヤ・ラドガなど）やベラルーシ（ポロツクなど）でも発見されている。ゆえに、メゼンツェフは、ポディルにおける居住は平地式の丸太造り建築を伴う古ルーシ文化が古キエフに広まるにつれて 9 世紀に開始されたと結論付けた。また、年輪年代法によって得られる、ポディルの文化層の最下部から発見された各々の木造建築の骨組みに使われた建材の伐採年（9 世紀末〜10 世紀初頭）は、ポディル内の各地区における居住開始時期を実際に反映しているようであるともかれは考えている（Ibid., pp. 59–60）。

一方、ポディルだけでなく、スタロキーフシカ丘、ザムコヴァ丘についても、トロチコの言うように 5 世紀末〜6 世紀初頭から継続的に居住されたのではないことが指摘されている。トロチコは、スタロキーフシカ丘で発掘される異教の神殿跡、砦跡を、この時期、古キエフが行政・政治的、信仰上の中心であった証拠であると考えているが、ヨハン・カルマー（現フンボルト大学？）によればそれらはもっと後の 10 世紀の構造物であるということである。1908 年、フヴォイカがこの遺跡を発掘し異教の神殿跡だと考えたが、1937 年に再発掘したカルゲルによれば、楕円形だとフヴォイカが言っているこの構造物は長方形に近い建物で石造建築の土台だとも考えられる構造であった。また、10 世紀初頭の石造建築に関する最近の研究は、それらがフヴォイカの言う異教の神殿跡に類似していることを示す。これらのことから、この構造物が異教の神殿であるという推測は疑わしく、建造年代もトロチコの言うよりずっと遅いのではないかと考えられるのである（Callmer, 1987, pp. 328–329）。スタロキーフシカ丘の北西部で発見される堀の年代についても、その盛り土から発見される、ろくろを使わず製作された土器を根拠に早い時代に想定されていたが、カルマーによれば、堀や砦の建造年代にこのことはほとんど関係を持たないし、堀のある部分では 10 世紀以降使用されるレンガのかけらが発見される

図 8　B・B・フヴォイカによる「異教の神殿跡」発掘　Callmer, 1987, p. 357 より。

ため、この堀もトロチコの言うよりずっと遅い時期に築造されたと考えられ得る（Ibid., p. 329）。このように、ポディルの発生時期、および丘の上の古キエフのまちの発生時期についても、これまでの通説があまりに早い時期にそれらを見積もり過ぎているのではないかという疑念が表明されている。

ポディルが 8〜10 世紀のあいだ急速に成長し、10 世紀前半には、封建都市の商工業地区を構成する成熟したポサドとなったというトロチコの考えに対しては、ポディルの出現を 9 世紀末から 10 世紀初頭にかけてだと考える研究者のあいだでも態度が異なっている。メゼンツェフは、ポディルは出現当初から古キエフという都市の経済中心という性格を帯びており、9 世紀末から 10 世紀にかけて、ポディルは古キエフのポサド（商工業地区）として、スタロキーフシカ丘の上のまちは古キエフのデチネツ（行政・政治中心）として急速に発展したと考える（Mezentsev, 1986, pp. 60–64）。一方カルマーは、9 世紀末から 10 世紀初頭にかけての時期に古キエフが、それまでの小さな農村集落の集合から、規模の点だけでなく社会的、経済的、政治的側面においても変化したが、古キエフの都市構造は、まだ明確には、デチネツとポサドのふたつの部分から構成されるようになっていなかったと考えている。このとき古キエフは都市内のいくつかの政治中心によって成り立っており、これらの政治中心は急速に商人や手工業者を古キエフに呼び寄せることになったが、古キエフがその内部にデチネツとポサドという明確な二項対立を持つようになったのは、10 世紀末から 11 世紀にかけてのことだと述べた（Callmer, 1987, pp. 346–349）。

われわれが今回話を伺ったサハイダク博士も、ポディルの居住開始は 9 世紀末から 10 世紀初頭にかけての時期と考えておられるようであったが、一方で、中世都市としての古キエフの成立については、独自の見解を披露された。博士は（私の理解が正しいならば）、ポディルこそ古キエフの都市化の原動力と考えておられるようである。これまでの通説では、ポディルは丘の上のまちの発展とともに（たとえばメゼンツェフ説）、あるいはその発展の後に（たとえばトロチコ説）形成されたと考えられているが、そうではなくポディルの形成こそが、丘の上のまちの成立につながるというのである。

10 世紀のポディルはかなり広い面積（100〜120 ha）を占めているのであるが、しかしこれまでの発掘ではポディルで墓地は見つかっていない。その一方で丘の上には大墳墓がある。これがポディルの人に属していたのではないか。たとえばのちの「ウラジーミルのまち」と呼ばれる区画は 10 世紀初頭には 10 ha しか居住されていないが、ここにも墓が多くあり、10 世紀末に建設されたデシャチンナヤ教会はそれ以前（10 世紀半ば？）の木郭墓の上に建てられた。また、のちに「ヤロスラフのまち」となる区画にはそれに先だって 80 ha に及ぶ（つまりほぼ全域を占める）異教の墓があった。

丘の上のまちの区画にあるこれらの異教の墓はポディル住民のものであり、のちに墓の上に都市が築かれたのであった。9 世紀後半から 10 世紀前半にかけての時期、丘の上は行政権力の居所にすぎず、古キエフの都市化はポディルのほうで発生した。やがて古キエフの都市化は丘の上にも及び、そこに「ヤロスラフのまち」やその子らのまちが建設された。以上がサハイダク博士による、古キエフの成立過程に関する見取図である。

お わ り に

本稿では、今回の調査旅行で聴く機会を得たサハイダク博士のレクチャーに刺激を受け、フパロのポディル考古学概説を参考にして、おもに 1970 年代のポディルに関する研究をまとめた。有機物の残存する文化層、年輪年代法の利用などの諸点が、筆者が以前概観したことのある北ロシアのノヴゴロドにおける考古学研究と重なっており（拙稿、2004 参照）、大変興味深く思われた。

ポディル発掘がその解決の大きな鍵になると思われる、古キエフの都市化の最初期の様相をめぐる問題には、上に見たように諸説あり、筆者の手に余るが、サハイダク博士の説は、これまでの先行研究とはまったく異なる新鮮なものであり、かつレクチャーを受けた限りでは説得力もあり、傾聴に値するのではないかと思われる。1980 年代以降のポディル考古学の研究の進展を知ることができれば、さらに考えてみたい問題である。

今回の調査旅行ではキーフのほかに、キエフ・ルーシ期には古キエフに次ぐ大きな都市であったチェルニヒヴ（チェルニゴフ）およびその近郊のシェストヴィツァを訪問した。それらについても、日本ではあまり知られていないと思われるため、概要をこの報告書に書くつもりでいたが、私の筆の遅さゆえ、今回は執筆を断念した。チェルニヒヴに関しては、ウクライナ語の先行研究が多く、手軽に参照できないという事情もある。別の機会を待ちたい。

参 考 文 献

Археологія Києва: Дослідження і матеріали / Від. ред. П. П. Толочко. Київ, 1979.

Древняя Русь: Город, замок, село / Отв. ред. тома Б. А. Колчин. М., 1985.

Гупало К. Н. Подол в Древнем Киеве. Киев, 1982.

История Киева. Т. 1. Древный и Средневековый Киев / Отв. ред. И. И. Артеменко. Киев, 1982.

История Украйнской ССР в десяти томах. Т. 1. Первобытнообщинный строй и зарождение классового общества. Киевская Русь (До второй половины XIII в.). Киев, 1981.

Толочко П. П. Происхождение и раннее развитие Киева [К 1500-летию основания] // История СССР. 1982 № 1. С. 39–49.

Толочко П. П. Древний Киев. Киев, 1983.

Колчин Б. А., Янин В. Л. Археологии Новгорода 50 лет // Новгородский сборник. М., 1982. С. 3–137.

Носов Е. Н. Новгородское (Рюриково) Городище. Л., 1990.

Рыбаков Б. А. Киевская Русь и русские княжества XII–XIII вв. М., 1982.

Швец Г. И. Выдающиеся гидрологические явления на юго-западе СССР. Л., 1972.（未見）

Швец Г. И. Многовековая изменчивость стока Днепра. Киев, 1978.（未見）

Mezentsev, Volodymyr I., The Emergence of the Podil and the Genesis of the City of Kiev: Problems of Dating. *Harvard Ukrainian studies.* 10(1/2), 1986.

Callmer, Johan, The Archaeology of Kiev to the End of the Earliest Urban Phase. *Harvard Ukrainian studies.* 11(3/4), 1987.

清水睦夫『スラヴ民族史の研究』山川出版社、1983 年。

『ロシア原初年代記』（訳者代表：國本哲男、山口巌、中条直樹）名古屋大学出版会、1987 年。

拙稿「都市ノヴゴロドの成立――最近の考古学研究を中心に」『ロシア史研究』75 号、2004 年。

筆者補足――本文注 3 において、ミハイロ・サハイダク博士の著書、『古キーフのポディル』（Сагайдак, М.А. Давнокиївський Поділ. Київ, 1991）が日本で入手不可能であると述べた。筆者は 2004 年 11 月 24 日付けでサハイダク博士へ手紙を書き、この本の貸与を申し入れていたが、本稿執筆中に博士からの返事はなかった。ウクライナ大統領選をめぐる混乱（問題となった決選投票が行われたのは 11 月 21 日）も一因であろうかと考えていた。ところが、博士からの 2005 年 3 月 23 日付けの e-mail で、本を入手したので送ることができるとの連絡をいただいた。おそらく、出版社では品切れで、博士自身も余分な部数を持っておられなかったのが、何とかして入手されたのであろう。この本を読んで、80 年代以降のポディル発掘について考察することは、将来の課題としたい。